

2016年1月5日

正 会 員 各 位

選挙管理委員会
委員長 高橋博樹

第73・74期会長候補選挙の投票のお願い
(会長任期2017年3月31日～2019年3月31日)
—投票締切日 2月15日(月) 17:00必着—

1. はじめに

本会の会長交代にあたっては、正会員の中から選挙によって選出された候補者を総会に付議の上、理事会の決議により選定します(定款第22条、細則第23条)。次々期会長候補選挙は、以下の手順に従って実施されます(細則24条)。

- ①代議員による投票を3回行い、代議員推薦の候補者を選定する。
- ②選挙管理委員会は、代議員推薦の候補者名を正会員に広報し、正会員に投票を求める。
- ③正会員は、次々期会長として適任と思われる者1名を、代議員推薦の候補者に限らず、全正会員の中から選び、投票する。
- ④理事会は、正会員の投票による最高得票者を次期副会長(次々期会長)候補として総会に付議する。

この定めに従い、選挙管理委員会は第73・74期会長候補の選挙を進めており、このお知らせは上記プロセスの②、③に関するものです。以下の方法に従い、上記締切日までに投票して下さい。

なお、細則第23条1項2号により会長は重任できませんので、投票に際しては、第72期会長着任が予定されている藤井保彦氏の氏名は記入しないようご注意ください。

また、選挙管理委員会規定第2条2項により、選挙管理委員である高橋博樹、栗田和好、古川はづきの3名は当該選挙の候補者になることができませんので、ご注意ください。

(定款、細則の条文は本会ホームページをご覧ください。)

2. 投票の方法

《メールアドレス登録済の方》

(2015年12月1日までに登録処理が完了している方に限ります)

1月15日(金)に本会から、各会員の登録メールアドレス宛に投票案内を送信します。案内が届きましたら、上記締切日17:00までにWeb上で投票して下さい。

注意：メールアドレスを登録されている方でも、Webでの投票を希望されない場合、またはエラー等により上述の投票案内が期日までに到着しなかった場合には次の郵送による方法でご投票ください。(申し訳ありませんが、メール不着の場合、再度案内を個別に送信することはできません。)

《メールアドレス未登録の方》

(2015年12月1日までに登録処理を完了されていない方)

本号綴込みの“会長選挙投票用紙請求はがき”に、必要事項をご記入の上、本会事務局に1月20日(水)までに到着するようお送り下さい。請求された方には、1月21日(木)に本会から投票用紙を郵送いたします。到着次第、上記締切日までに本会事務局に到着するように投票をして下さい。なお、投票用紙にて投票を行った方のWeb投票は無効となります。

注意：投票用紙の請求は、本号綴込みの請求はがきに限りません。

ご記入頂いた会員番号、氏名、等をもとに投票用紙を郵送いたしますので、記入ミスのないようお願いいたします。

3. 代議員推薦候補者

前記プロセスの①となる、第73・74期会長の代議員推薦候補者の投票を行った結果、次の3名(50音順)の方が選ばれました。各候補者の経歴、専門分野、および抱負等(①生年月日②学歴③職歴④専門分野⑤本会の理事・監事としての経歴⑥抱負)を以下に記載します。投票の際のご参考にして下さい。

ただし、投票はこれらの候補者に限らず、全正会員(第72期会長予定者および選挙管理委員を除く)を対象に行うことができることにご留意ください。

川村光氏(大阪大学・理学研究科・教授)

①1954年9月23日②1977：東京大学理学部物理学科卒業
1979：東京大学理学系研究科物理学専攻修士課程修了 1982：東京大学理学系研究科物理学専攻博士課程修了(理学博士)③
1982：大阪大学教養部助手(物理) 1989：大阪大学教養部助教授(物理) 1993：京都工芸繊維大学工芸学部教授 2000：大阪大学理学研究科教授(宇宙地球科学) 2013より学振・学術システム研究センター・主任研究員(数物系)兼務④物性物理学⑤
2013/4-2015/3 理事(会計理事)⑥抱負というのとは少し違うかもしれませんが、折角頂いた機会ですので、以下、物理学と物理学会について昨今感じていることを、少し述べさせて頂きたいと思います。いきなりで恐縮なのですが、今、我が国の学術と高等教育は、本当に危機的な状況にあると思います。過去、先人の叡智と努力により築き上げてきた我が国の「知の蓄積」が、今や瓦解し変質しつつあるのではないかという危機感を抱かざるを得ません。このような時代と世相の中、日々物理の探求に励む研究者あるいは物理学を志す人々の拠り所としての物理学会の重要性は、あらゆる点で、ますます高まっているのではないのでしょうか？物理学会が、その自由闊達な雰囲気を持ち、権威に屈しない学問の自由と独立性を保ち、次の世代につなげて行くことが今ほど求められている、そして、そのこと自体が大きな困難を伴う時代は、過去なかったかもしれません。自然科学の最も基礎の部分を担当している我々物理学者と物理学会は、ある種の「使命」を帯びているのではないかと思います。物理学には、3つの特徴、側面があると思っています。その1として、物理学は、その歴史に裏打ちされた、強固なdisciplineを与えます。我々物理学者が、その専門が大幅に異なる場合でも、何となく「物理屋」としての一体感・同一性を感じることがあるのは、正にこのdisciplineのなせる業だと思います。現代のような混乱の時代にあっては、物理学が与える、このdisciplineは極めて貴重だと思います。物理学会は、教育を通し、このdisciplineのエッセンスを社会に伝道する役割を帯びているように思います。その2として、基礎科学としての物

物理学は、より fundamental へと物事の根源を追究していく宿命を負っています。より極微へ、より高エネルギーへ、より宇宙開闢直後へ、という方向です。物理学の純粋性が強く出ると同時に、この方向が必然的に引き起こす巨大科学としての諸問題にも、否応なく直面することになります。問題は、もはや研究者コミュニティの中では閉じず、経済問題や資源エネルギー問題も含め、より広く、社会との関係が重要になってきます。この問題には、決してネガティブな面だけではなく、人類が直面する重要な問題を極限的な形で先取りしているようなところもあります。物理学会がこの問題を直接ハンドルの訳ではないにしても、ここでは高度な知恵が必要とされていることも確かです。その3として、物理学は、fundamental への探求で挙げた成果と discipline を背景に、より多様な世界へ、必ずしも以前は物理学の対象と思われていなかったような世界へと拡がっていく方向性をも合わせ持っていると思います。物理学が本来的に有する、一般性・普遍性が、この方向を drive するからです。必然的に、物理学は豊かな学際性を帯びることになります。このように見てくると、物理学は現在、社会が抱える多くの重要な問題と本質的に関わっており、極めて重要な立ち位置にあると思います。少々大風呂敷気味の話になったような気もしますが、物理学会が、この混迷の時代に、社会の「背骨」の役割を果たせるとしたら、こんなに素晴らしいことはないでしょう。

須藤彰三氏（東北大学大学院理学研究科教授）

①1954年11月7日②1978年3月 東北大学理学部物理学第2学科卒業 1981年3月 東北大学大学院理学研究科物理学第2専攻修士課程修了 1984年3月 東北大学大学院理学研究科物理学第2専攻博士課程修了（理学博士）③1984年4月 東北大学教養部助手 1990年5月 東北大学教養部助教授 1993年4月 東北大学理学部助教授に配置換え 1994年4月 東北大学大学院理学研究科助教授に配置換え 2002年4月 東北大学大学院理学研究科教授、現在に至る。この間、1987年10月-1989年9月ペンシルバニア大学客員研究員。④表面物理、光物性、物理教育⑤2014年4月-2016年3月日本物理学会庶務理事（物理教育、支部担当）⑥ここ2年間、日本物理学会理事として国内外で活動し感じてきたことは、本学会がとて高い評価を受け、尊敬されているという事実です。それは、ひとえに会員の皆様の貢献に基づくもので、会員の多さと多様性が鍵になっていると考えています。ノーベル賞に代表される国際的な賞の受賞者から、日本を支える研究者・教育者、そして大学院生・大学生までを含めた会員が、物理学に関する多様な活動を継続し、発展させています。一方、学会として研究や教育の目指すべき理想像や現在の指針を聞かれた時に、返答に困るのも事実です。今後、物理学会を一層発展させるためには、それらの問題に関して、学会員のゆるいコンセンサスが必

要なのではないかと考えています。 本会の一層の発展のために考えられることは、(1)年次大会、大会、講演会を活性化させ、会員の交流を促進することが挙げられます。先端の研究ばかりでなく、若い研究者を育てるためにとても重要な役割を果たしています。一部、硬直化が感じられます。(2)英文誌JPSJ、PTEP、日本物理学会誌、さらにWeb等を通して、情報発信・交流の活性化を図る必要があります。(3)物理教育・男女共同参画活動を活性化させ、幅広く物理に興味を持つ中高生・一般市民、そして、優秀な研究者を育てる必要があります。(4)基礎科学の振興に関して、研究や教育の現場からの声を本学会がまとめ、日本学術会議や文部科学省等に届け、研究費の確保と科学政策への提言を行うこと（Science Policy）も必要なのではないでしょうか。(5)21世紀に入って、やや急な会員の減少が始まりました。その実態を明確にし、学会のビジョンに加えることも重要であると考えています。私は、学生時代からずっと仙台を中心に活動しています。研究活動において地域性を感じたことはありませんが、物理教育（理科教育）の活動は、理事として活動して初めて、とても大きな地域性を感じています。その過程で、理科教育の改善に関しては、望ましい指導者の育成から始まる大きなビジョンが必要と考えられるようになりました。物理学を通して身に付けた論理的思考能力は、一生の宝であり、日本の礎となるからです。日本物理学会は、地域や学校、企業間の枠を超えて情報を共有できる場であることから、ますます研究・教育に関して大きな活動が期待されるものと考えています。そのようなコミュニケーションを活性化させたいと考えています。

宮下精二氏（東京大学大学院理学系研究科物理学専攻 教授）

①1954年2月9日②1976年 東京大学理学部物理学科卒業 1978年 東京大学理学系研究科修士 1981年 東京大学理学系研究科博士（理学博士）③1981年 東京大学理学部 助手 1988年 京都大学教養部、助教授 1991年 京都大学大学院人間環境学研究所 助教授 1995年 大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻 教授 1999年 東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻 教授 2005年 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻教授④統計力学、物性基礎論、磁性⑤理事（庶務：学会担当）2000年9月～2002年8月 理事（会誌編集委員長）2013年4月～2015年3月⑥いろいろな物理学の分野間の相互理解を高め、総合的な物理学を楽しめるコミュニティの発展を目指す。物理学会からの社会一般への物理に関する情報の提供をより充実させ、物理の諸分野への貢献度や学問自身のおもしろさを社会への浸透をはかり、若い世代の物理への関心を高める工夫をする。広く世界の物理学会、関連組織との連携を高め、国際的発信力を強化する。